

# 近代化産業遺産

## 明延鉱山の北星社宅



文化財ミニパンフ

近代化産業遺産群 33 平成 19 年 11 月 30 日 経済産業省認定

明延鉱山は明治 42 年に錫鉱脈が発見されたことで急速に発展し、日本最大の錫鉱山となりました。全国で産出する錫の約 90% を採鉱していましたが、昭和 62 年に閉山しました。明延鉱山（養父市大屋町明延）・神子畑鉱山（朝来市神子畑）・生野鉱山（朝来市生野町口銀谷）は、明治政府の官営鉱山として発達し、その後は三菱金属株式会社の主力鉱山となりました。こうした鉱山資源を活用する兵庫県但馬「鉱石の道」事業のシンボルとして北星長屋社宅を整備しました。

生活する上で最も重要な施設が住宅です。明延では主要な大形施設（明延病院・協和会館・購買会）が桜ヶ丘地区に建設されました。そして平地には社宅が建設されました。大正時代に坂ノ谷地区・妙見地区・大仙地区、さらに昭和初期までには観音町地区、明盛地区などに木造長屋の社宅が整備されました。昭和初期には桜ヶ丘地区を中心<sup>だいせんそさいじょう</sup>に大仙粗砕場のある南方向に鉱山町が整備されていました。

しかしそれでも社宅が不足しました。そこで新しく山を造成して社宅町を建設しました。昭和 8 年に北星地区、続いて昭和 9 年に東山地区、昭和 13 年に旭山地区、昭和 27 年に上部観音町地区等です。桜ヶ丘地区から下流の北方向に向かって町が拡大しました。昭和 31 年の明延は人口 4,167 人、明延鉱山従業員 1,554 人、明延小学校児童 680 人が生活していました。

明延の町並みは、昭和という時代に発展した鉱山都市であり、そこには木造 1 戸建、木造 2 戸建のほか、長屋建築やプレコン建築などで多くの社宅が作られました。明延の鉱山町は、日本の社宅史研究にとって大変重要な産業遺産となっています。



現在の北星地区（旭山側より）



北星長屋社宅 5号・10号



北星プレコン社宅



北星長屋社宅 10号 玄関側

# 明延の北星長屋社宅

明延の北星地区には、木造の北星長屋と鉄筋コンクリート製の北星プレコンがあり、あわせて北星社宅と呼びます。昭和8年から昭和13年にかけて北星西部に14棟（住宅76戸）の長屋が作られ、その内4棟（住宅22戸）が残っています。社宅台帳では西部5号、10号、11号、12号と呼びました。

西部5号の長屋は昭和8年の建築です。規模は長さ33.18m、幅6.63m、高さ4.89mです。この長屋に5戸が入居しました。屋根はコンクリート瓦やトタンで、外壁は土壁の上に杉板を張っています。室内に竈<sup>かまど</sup>がある部分の外壁は、コンクリートブロックです。

間取りは、3畳・6畳・4畳半の和室がそれぞれ1室です。そのほかに2畳の玄関土間、3畳の台所、1畳分の押入2か所、1畳分の便所のほか、縁側があります。社宅には風呂場はなく、北星共同浴場を利用しました。

6畳間の壁際の天井には、垂れ壁が作られ、吊り床となっています。

台所の水は長屋の前まで来ていた水道でコンクリート製の枡<sup>ます</sup>にためて、横にある流しで食事の支度をしました。竈は一つです。社宅の電気料金は無料でした。このため早くから電気炊飯器、電熱器などの電気製品が普及しました。また住宅の外には共同の洗い場、共同の倉庫がありました。

地区	形状	建築年	棟数	戸数
北星西部	長屋 プレコン	昭和8年～13年	14	76
		昭和29年	8	16
北星東部	長屋	昭和8年～13年	13	49
東山	長屋	昭和9年～34年	36	136
旭山	長屋 明善寮	昭和13年～26年	37	145
		昭和27年	2	28

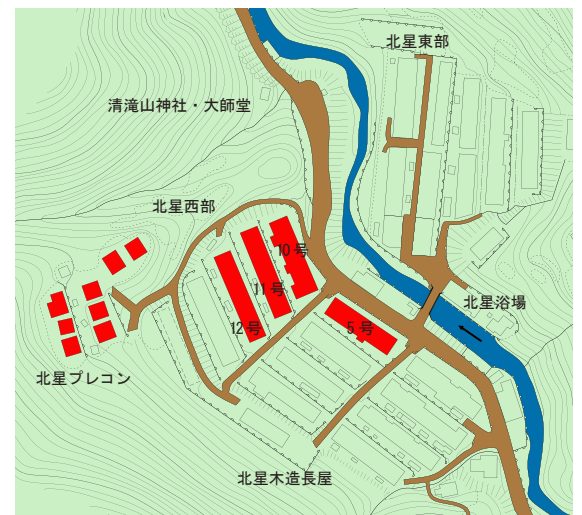
明延北部地域の鉦員社宅（昭和36年）



北星社宅付近の航空写真（昭和60年頃）



旭山側から見た北星社宅（昭和60年頃）



北星社宅配置図（赤：現存建物）



北星社宅社宅現況（室内）



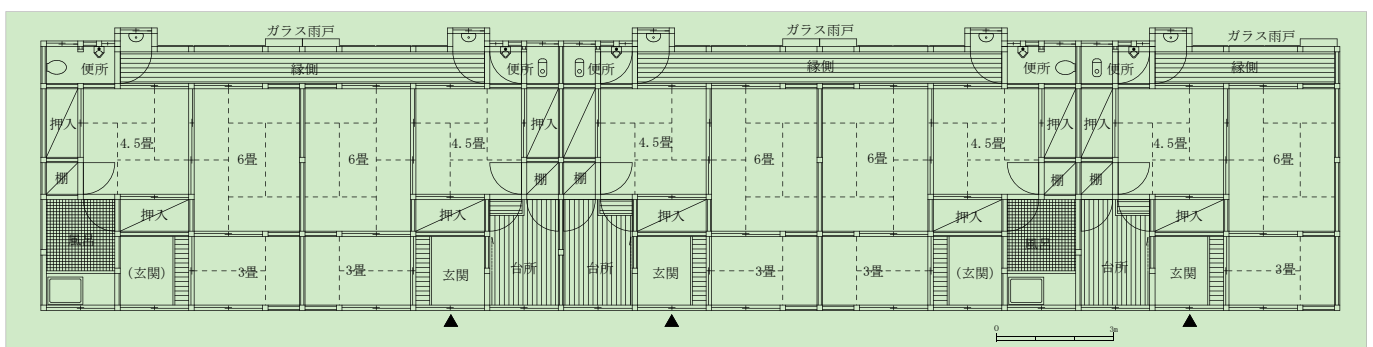
北星社宅社宅現況（室内）



北星長屋社宅現況（玄関から室内）



北星長屋社宅現況（台所）



明延・北星長屋社宅 西部10号 現況図（2戸1改修後）

# 北星長屋社宅の改修

昭和50年代前半、社宅の生活環境を改善するために、住宅2戸を1戸で利用する「2戸1改修」が行われました。連続する2戸住宅の縁側の壁を取って通路にしました。部屋数が増加し、子ども部屋、夫婦部屋など用途にあわせた部屋の確保が可能となりました。西部5号の長屋は、5戸から3戸で利用するようになりました。さらに後年になると片方の台所を風呂場に改修しました。

建築当初の1戸は、正面6.63m、側面6.63mの正方形です。建物の中心に1畳分の押し入れを置いて、室内を4分割しています。玄関の土間を入ると壁があり、土間で台所に続きます。反対側は3畳の部屋です。その奥の空間に6畳と4畳半の部屋があります。

設計の特徴は、第1に正方形プランの間取りであり、敷地の規模にあわせて住宅5戸型、住宅6戸型への設計変更が容易です。第2に玄関から奥の部屋が見えない構造であり、プライバシーが保護されています。第3に住宅の中心にある押し入れを中心に、人の流れが効率的に円を描くように動く導線が採用されています。規格化された平面構成は、アパートなど集合住宅の祖型ともなる洗練され、優れた平面構成です。



北星長屋社宅改修後（室内）



北星長屋社宅改修後（吊り床と照明器具）



北星長屋社宅改修後（室内）



北星長屋社宅改修後（縁側）



北星長屋社宅改修後（北星5号 玄関側外観）



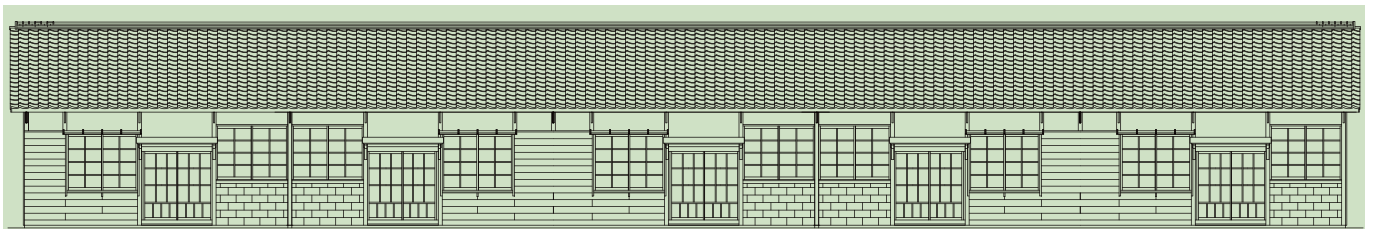
北星長屋社宅改修後（台所）



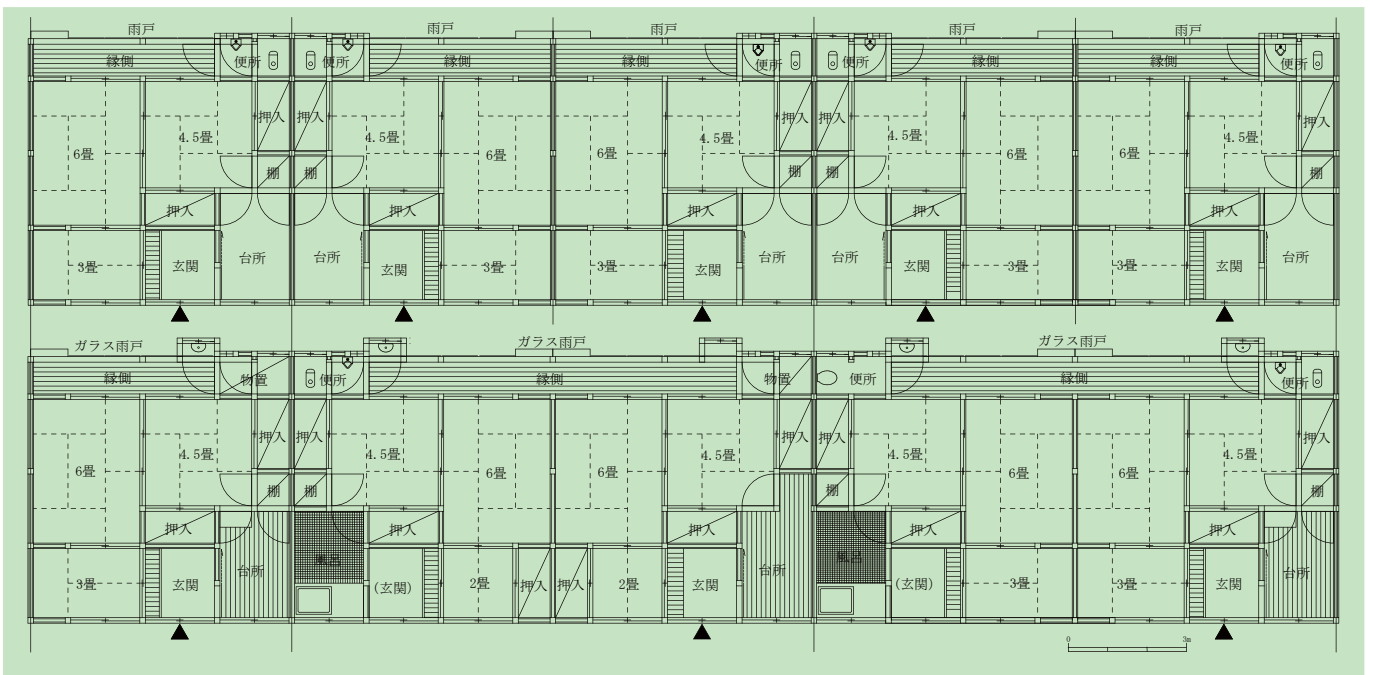
北星長屋社宅改修後（かまどと流し）



北星長屋社宅改修後（玄関とかまどの煙突）



明延・北星長屋社宅 西部5号 北立面図（玄関側・建築当初）



明延・北星長屋社宅 西部5号平面図（上：昭和8年建築当初・下：現況）

## ●北星地区にあるプレコン工法の社宅

昭和29年、北星地区に8棟（住宅16戸）のプレコン社宅が建設されました。社宅台帳では15号から22号と呼びます。これが明延で最初に作られたプレコン社宅であり、日本最古級のプレコン建築です。正式にはプレキャストコンクリート工法と呼びます。2階建て、各階層を1戸が利用しました。

プレコンは、工場で作った鉄筋コンクリート製の柱やパネルを現地に輸送して、鉄筋コンクリートの基礎の上に組み立てる方法です。東京工業大教授の田辺平学先生たちが昭和24年に開発し、日本プレコン建築株式会社が建設しました。工期が短く、火災にも強いという利点があります。

プレコンは正面幅7.19m、側面幅7.19mの正方形プランで、高さは6.8mあります。室内を4分割しています。板の間の玄関・洗面所・便所などが6畳分、台所が6畳分、和室は8畳相当が2室で、片側には室内に2畳分の押入があります。

正方形プランのプレコンは、横方向にも上層方向にも拡張性に優れた構造です。日本の高層マンションの祖型ともなりえる近代的な設計が行われています。

プレコン社宅は妙見地区、観音町地区、坂ノ谷地区にも建設されました。昭和30年に明延病院、昭和32年に協和会館がプレコン工法で建築されました。明延は全国でも有数のプレコン都市になりました。

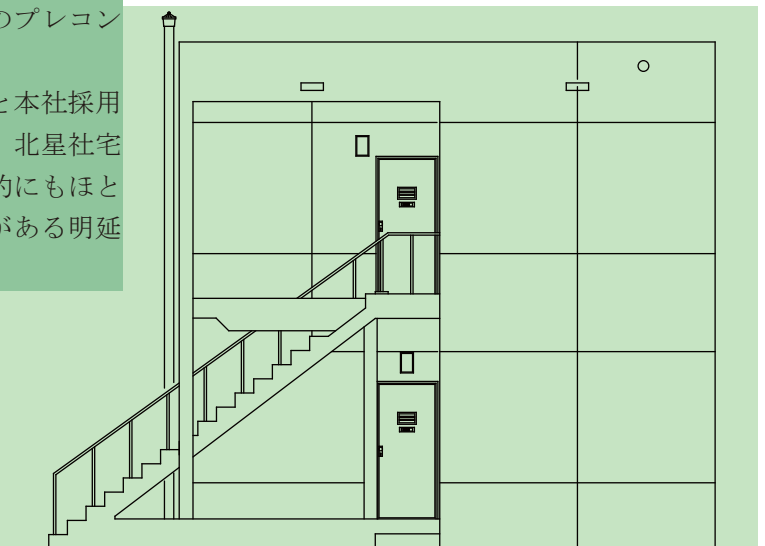
鉾山社宅には、現地採用の労働者が使う鉾員社宅と本社採用の職員（転勤族）が使う職員社宅の区別があります。北星社宅は鉾員社宅です。当時の姿を伝える鉾員社宅は全国的にもほとんど残っていません。見なれた長屋やプレコン建築がある明延の風景は、全国的にも大変重要な鉾山景観です。



北星にあるプレコン社宅外観

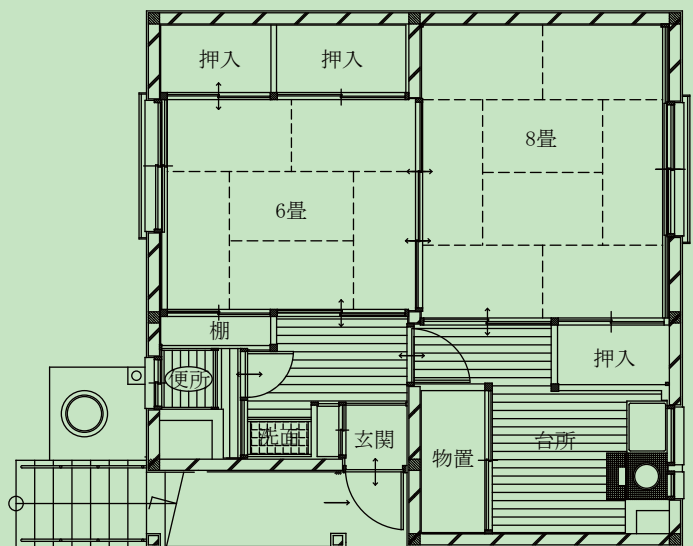


かまどの残るプレコン社宅の台所



## ●明延まるごと博物館

明延にはあけのべ自然学校・明延ドーム・明延鉾山探検坑道・鉾山学習館・旭山キャンプ場のほか、一円電車や第一浴場、北星社宅などがあります。明延は歩いて見て体感する鉾山博物館です。



北星プレコン社宅（立面・平面図）

0 3m